

紀伊の国 地名物語

地名に秘められた謎を紐解く

監修／日本地名学研究所長 池田末則

私たちが旅に出かけたとき、

ふとユニークな地名に出合って驚かされることがある。

特に、長い歴史・文化に育まれてきた高野や熊野、南紀の各地には、

神話や伝説、物語にちなんだ地名が数多く存在する。

地名の謎解きをすることで、いにしえから現在まで

連綿と継承されてきた、人々の信仰や思いの糧が見えてくるに違いない。

いま、地名物語を訪ねる旅の扉が開かれる。

はし おり とうげ

箸折峠【中辺路町】

極楽浄土を夢みて祈りを捧げた峠道

牛と馬にまたがった牛馬童子像が祀られる箸折峠。古来、熊野詣の参拝者が花を折って仏に供えたことから、「花折坂」とも呼ばれる。花折坂の「花」は

端の意味で、峠の先端の曲がったところを指した。伝説によると、花山法皇がこの峠で昼食を取ろうとしたが、箸を忘れたので“ 茅 ”を折って箸の代わりにしようとした。このとき、茅から水のようなものがこぼれ落ちたので、いぶかしく思った法皇が「これは、血が露か」と尋ねたとか。

以来、この峠を「箸折」、峠の麓にある里を「近露」と呼ぶようになったという。

な ち

那智【那智勝浦町】

神仏の教えが込められた名瀑布

「難地」が転訛、あるいは本宮や新宮の後に開けたことから、「のち」が「なち」に訛ったともいわれるが、はつきりしない。あるいは、比叡山が「叡山」となるように、都から遠く離れた「鄙地」の頭音を省略した地名とも考えられる。那智山青岸渡寺などに伝わる縁起によると、サンスクリット語で河や江のことを「那提」といし、滝そのものを大きな川とみなして「那智」の文字を当ててようになったという。当代随一の名瀑を目の前にたたずめば、今もそこにいにしえ人が信じた神仏の息吹を感じることができるだろう。

たい じ

太地【太地町】

大自然の荒々しい造形美を地名に刻む

鯨漁の本場として知られる太地湾。古来、海岸線の入り組んだ“ たぎたぎ ”しい(凹凸がある)地形をしていることから、「たぎ地」が転じて「太地」と呼ばれるようになった。奈良時代、遣唐副使の吉備真備が唐からの帰路、遭難してたどり着いたのがこの地。文政年間の記録に、「吉備真備の一族の与呂子右衛門なるもの、此地に定住し...(中略)...太地の村をはじめたるなり」とある。天応元年(781)、実に光仁天皇の時代のことだといふ。



熊野本宮大社旧社地・大斎原

しん ぐう

新宮【新宮市】

熊野に降り立った神々が憑依する聖地

『古事記』によれば、神武天皇一行は熊野で大きな熊に化けた「荒ぶる神」の抵抗に遭い、一人残らず正気を失った。そこへ、高倉下(たかくらじ)という者が一振の霊剣を持って現れ、神武天皇に献上すると、荒ぶる神はただちに滅んで道が開けたという。この高倉下を祀っているのが神倉神社。熊野の神は最初、この地に降臨したが、のちに熊野三山の一つ、熊野速玉大社へと遷座されたため、神倉神社の“ 元宮 ”に対して、“ 新宮 ”という地名が起こった。時の為政者からの信仰が厚く、新宮に残される数多くの古神宝類は贅を尽くしたもののばかりである。

おお ぐも とう やま

大雲取山【那智勝浦町、熊野川町】

雲に手が届くほど峻険な参詣道

嘉永元年(1848)に発刊された『西国名所図会』によれば、「那智本堂の後より山に登ること二百町、道険しく頗る難所なり... 」とある。雲取の「取」は峠や坂のこと。雲に手が届くほど高い所にある峠ということから名付けられたといわれる。行き倒れた人も多かったのだろう、江戸時代中期には、特に峻険な坂道250丁の間に自然石を敷き詰めて、歩行の便を図ったという。老杉と苔に覆われた森閑とした古道で、熊野の自然の営みを肌で感じるができる。



あ す か

阿須賀【新宮市】

不老長寿伝説を伝える古代の霊場

奈良の飛鳥(明日香)と同じような語源を持っている。平安時代に右大臣・藤原宗忠が書いた『中右記』という日記によれば、熊野川河口のこの付近は「浅州処」といわれ、神々が宿る霊場であった。もともと産土神を祀っていたが、中世以降、熊野詣の隆盛とともに、熊野三山の神を習合するようになったという。秦の始皇帝の命により、不老長寿の仙薬を求めて東海に旅立った徐福が、この地に漂着したとする伝承がある。それにちなんで阿須賀神社の背後に広がる丘陵は、蓬莱山と呼ばれている。



阿須賀神社

ほん ぐう

本宮【本宮町】

全国の熊野信仰の拠り所

熊野本宮大社の門前町として早くから開けた。熊野本宮大社の創建は神武天皇の東征以前と伝わり、古くは熊野坐神社といわれていたという。また、平安時代以降、阿弥陀信仰が起こると、熊野三所権現の中心地と考えられるようになり、熊野に憧れる人たちの心の拠り所として知られるようになった。明治22年(1889)の大水害のため、熊野川の中洲にあった熊野本宮大社は、現在の地に移されたが、さすが熊野大権現のお膝元だけあって、厳粛で神さびた趣が伝わってくるようだ。



わ か うち かた お なみ

和歌浦(片男波)【和歌山市】

古代ロマンをかきたてる美しい浜辺

かつて、和歌浦は弱浜と呼ばれていたが、神亀元年(723)、聖武天皇が紀伊に行幸した際、この地のあまりの美しさに感動し「明光浦」と改めたという(続日本紀)。「あかのうら」が、いつしか「わかかのうら」に転化したと予測される。万葉集にも数多く詠まれた風光明媚な名所で、どこまでも広がる白砂がいにしえの世界へと誘ってくれるだろう。山部赤人が詠んだ「若の浦に潮満ち来れば、潟を無み 葦辺をさして鶴鳴き渡る」という名歌は、片男波海岸の語源として知られている。

(上) 仏の舞、(下) 御田の舞



定されている。中世には、密房花や仏花を栽培し、高野山に献納していたことから、いつしか「花園」と呼ばれるようになったという。のどかな田園風景が遠近に広がる素朴な土地柄で、女人即身成仏を表現した「仏の舞」や農耕神事を盛り込んだ「御田の舞」など、珍しい古典芸能が受け継がれている。

はな その

花園【花園村】

古典芸能の里として知られる

高野山の花畑

弘法大師空海が高野山を開創して以来、その子弟たちによって拓かれた山里。高野龍神国定公園にも指定されている。中世には、密房花や仏花を栽培し、高野山に献納していたことから、いつしか「花園」と呼ばれるようになったという。のどかな田園風景が遠近に広がる素朴な土地柄で、女人即身成仏を表現した「仏の舞」や農耕神事を盛り込んだ「御田の舞」など、珍しい古典芸能が受け継がれている。

はて なし さん みやく

果無山脈

どこまでも果てることのない熊野の難所



たという。古くは、「果終山」とも書く。実際には、難路の山並が果てしなく連なっていることから名付けられたと思われる。伝説によると、一つ目、一本足の「いっぽんたたら」という怪物が山奥に棲んでいて、12月(年の果て)になると麓に下りてきて旅人を襲ったとか。古来、この路がいかに難所だったかを今に伝える説話といえる。

わ か やま

和歌山

名城とともに歴史を刻む

『日本書紀』によれば、五十猛命が、多くの樹種を持ってこの地に降臨し、大八州国に種を播いたという。紀の国は「木の国」が転化したものと思われる。和歌山の用字が歴史に登場するのは、天正13年(1585)以降のこと。豊臣秀吉が紀州を平定し、弟の秀長を国王として吹上浜の岡山(虎臥山)に豪壮な城を築いたことから、海浜の名勝「和歌浦」に対して、和歌“ 山 ”と呼ばれるようになった。豊かな自然・文化・歴史にはぐくまれ、古来、多くの歌枕に詠まれたことから、和歌の山と呼ばれるようになった、という説もある。

く ど やま

九度山【九度山町】

空海の慈愛をしのばせる信仰の山

古くは、高野山の地主神・狩場明神、犬飼明神がクド(かまど)を築いたという伝承がある。慈尊院に伝わる縁起によると、その昔、弘法大師の母・阿刀氏が、我が子会いたさに高野山を訪ねたが、厳しい女人禁制のために入山を許されなかった。そこで空海は、高野山の麓に創建した慈尊院に母親を迎え入れ、月に9度、山道を遠しとせずに面会に訪れたという。この地が「九度山」と呼ばれるようになったのは、このときからである。関ヶ原合戦で敗れた真田昌幸・幸村父子が隠棲した地として知られ、いまも真田庵や真田淵など、ゆかりの遺跡が残されている。



ふし おがみ

伏拝【本宮町】

和泉式部ゆかりの伝説に彩られた王子

中世の人たちにとって、熊野詣はいくつもの難所を乗り越えなければ訪ねることができない極楽浄土の地であった。この王子までたどり着き、はるか遠くを眺めると、神々しい熊野本宮大社の姿が透かし見える。あまりのありがたさに、思わず伏し拝んだことから「伏拝」と呼ばれるようになったという。また『風雅和歌集』には、平安時代の女流歌人・和泉式部がこの地に臨んだとき、



にわかに月の障りとなり、熊野本宮参拝をあきらめ「晴れやらぬ身の浮雲の棚引きて 月のさわりとなるぞかなしき」と詠んで、彼方に見える熊野本宮を伏し拝んだ...という話が紹介されている。平安・鎌倉時代、熊野比丘尼が広めた説話の一つである。

高野

空海が拓いた平原の幽地

弘法大師空海が開山して以来、多くの人たちの信仰を集めてきた霊場「高野山」。古くは「たかのやま」と呼ばれ、弘法大師以前から、役小角や僧行基など山岳修験者にゆかりの深い霊峰だった。伝説によると、唐での留学を終えた弘法大師が、唐の明州の砂浜から三鈷竿さんこさん（密教の道具）を投げたところ、はるか海を渡って高野山の山頂に落ちた。弘法大師は、その幽邃ゆうすい古雅な聖地で、丹生都比売にうつひめという女神に会い、真言密教を広めるようにとの託宣を受けたという。これが高野山1200年の法灯の始まりである。元来、高野の「野」は平地を意味するといわれ、弘仁7年（816）空海が嵯峨天皇に上表した文には、「吉野より南に行くこと二日、更に西に向かつて去ること両日にして、平原の幽地あり、名づけて高野といふ……」とある。現在でも、山頂部分では人家が軒を連ね、奥院へと続く道はなだらかである。三鈷竿は高野山に偶然落ちたのではなく、霊場にふさわしい「平地」を選んで飛んでいったのではないか。天高く屹立する杉櫨の木立に囲まれて、ふと1200年前の故知に思いを馳せれば、弘法大師の優しげな眼差しが見え隠れするようだ。

熊野

緑深き神の隠れ家

神武天皇や八咫鳥やたがらすなど、神話の英雄が活躍した舞台として知られる「熊野」。熊野の「クマ」は、隠るかくもから転じたといわれ、古来、神がこもる場所として神聖視されてきた。あるいは、熊野は死者の靈魂がこもる聖地でもあるという。『日本書紀』によれば、「伊弉諾尊が火の神を生むときに、火傷を負って亡くなったので、紀の国の熊野に葬った……」とある。また、素戔嗚尊は紀の国の熊成峯くまなりのかみから、根の国（地下の世界）に入ったと記されている。また、地形的な特徴に由来するという説もある。クマは「曲る」「限る」の意とも考えられ、曲流する川の隈野くまのに開けたので「熊野」と書かれるようになったという。曲や隈は「曲がる」「くせもの」を連想させることから、「熊」の好字を当てようになったともいわれる。いにしえ人が「美熊野」「真熊野」と讃えた古代の社叢を歩けば、枝葉を渡る風の音、おぼろげに込む木洩れ日に、神々が紡いだ物語が聞こえてくるかもしれない。